

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520236

研究課題名(和文) エリオット詩劇と共同体再生への道筋

——宗教的世界と世俗的世界の境界を挟んで——

研究課題名(英文) T.S. Eliot's Poetic Drama and a Process to Revive the Community  
— Back and Forth between the Secular World and the Religious World —

研究代表者

佐伯 恵子 (SAEKI KEIKO)

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：40285416

研究成果の概要(和文)：

T.S. エリオットの詩劇作品が彼自身の詩世界や評論・文化論といかに密接に係わり合っているかについて分析を行なった。「世俗的世界」の批判に始まり、「宗教的世界」を重んじるに到った詩世界をそのまま受け継いだのが詩劇前半である。やがて、エリオットが評論執筆を通して、それら両世界の間に見えない繋がりや交流を見出してゆくにつれて、詩劇後半も変化してゆく。エリオットは、劇場という場を使って、人と人とのつながりが希薄となった共同体が再生するために重要な手がかりを示そうとしたのである。

研究成果の概要(英文)：

I consider how closely T.S. Eliot's poetic drama, poetry and criticism correlate with each other. The theme of his poetry gradually shifts from the sterile urban world in his early poems to the religious world in his latter ones. His early poetic dramas were as religious as his last poems. But in his later dramas, Eliot comes back to the secular world and admits that a secular life is as important and good as a saint-like life.

We can see the same shift of his sense of values in the correlation between his poetic drama and criticism. In his early view of community, Eliot valued the religious life above the secular life. But he gradually comes to recognize an invisible cordial interchange between the religious life and the secular life. For Eliot, a theatre was a significant place to show an ideal process to revive the community.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英米文学、T.S. エリオット、詩劇

## 1. 研究開始当初の背景

(1) T.S. エリオットは日本でも古くから読まれ、研究されてきた作家であるが、彼の詩劇は、詩や評論と比べて一時代を画すほどの傑作とは評価されず、十分に論じられてはこなかった。エリオットの詩劇の全体像を細部に渡り、かつ総合的・俯瞰的に分析した研究書は、アメリカにおいては1960年、1963年、1994年に出版された3冊のみであり、日本においては皆無である。このように、詩劇研究がエリオット批評史の周辺に置かれてきたのが現状である。

(2) エリオットの詩や評論と詩劇を総合的に関連づけた研究は、少ない。例えば『四つの四重奏』と『一族再会』の関連などはしばしば指摘されてきたことではあるが、これまでに、彼自身の詩世界と劇作品とが連続して論じられることはなかった。また、批評家・文化人としてのエリオットの活動と、当時の社会情勢が彼に与えた影響と、詩劇作品とを結びつけた研究もほとんどなされてはいない。

(3) 筆者は、これまでの研究において、エリオットの幾つかの詩劇について個別に論じてきたが、その過程で、エリオットの詩劇を彼の著作全体の中において読み直す重要性を認識するに到った。エリオットの詩や評論を詩劇と関連づけて読んでいくと、それらが有機的に結びついていることがわかってくる。それを示すことには意義があると考えた。

## 2. 研究の目的

T.S. エリオットの詩劇再読・再評価が本研究の主目的である。先行研究を踏まえた上で、エリオットの詩劇が彼の著作全体の中でいかなる位置づけにあるかを確認してゆく。その過程で、エリオットの詩劇が持つ意義として着目したのは以下の2点である。

(1) エリオットの詩と詩劇との関連：  
エリオットの詩作品全体を通して発展してゆく主題が、詩劇作品に引き継がれ、さらに発展・変化してゆくさまをたどる。

(2) エリオットの詩劇と評論との関連：  
エリオットの詩劇作品が持つ社会的意義を、評論・文化論との係わりから捉える。合わせて、エリオットにとっての劇場の意義と、詩劇を書くことでエリオットが社会に向けて伝えようとしていたメッセージについても明らかにしてゆく。

## 3. 研究の方法

これまで筆者は、エリオットの詩劇6つのうち4つについて論じてきた。本研究ではまず、残りの詩劇2作を個別に分析する。

その上で、エリオットの詩劇が彼の著作全体の中でいかなる位置づけにあるかに着目して、これまで論じてきた作品についても再度考察しつつ、詩劇全6作を総括する分析を行なう。

エリオット自身の詩と評論が詩劇にもたらした影響は、それぞれに異なる重要性を持つ。エリオットの詩世界を構成する「宗教的世界」と「世俗的世界」という基本構造は、その両世界の関係も含めて、そのまま詩劇に受け継がれ、発展してきた。一方、エリオットが評論の中で折にふれてめざした「共同体再生」というテーマは、彼に詩劇執筆の動機をもたらし、方向を示し、原動力を与えてきた。そして、詩や評論の中でエリオットが表す考えや価値観は時を経て変化し、詩劇はその変容を忠実に反映させてきたのである。本研究では、第1に、「宗教的世界」と「世俗的世界」という2つの世界の間にエリオットが見ていた関係を物差しとして、第2に、社会批評・文化論や講演における変遷をもうひとつの物差しとして、詩劇の変遷をたどってゆく。上記【研究の目的】で挙げた2つの着目点に沿って、以下のような方法で分析を行なった。

(1) エリオットの詩と詩劇における主題の密接なつながりを明らかにする。その際に着目するのは、両者に共通して描かれる「宗教的世界」と「世俗的世界」との関係である。エリオットの詩は、「世俗的世界」における人々の荒廃した精神を批判的に描いた初期詩に始まり、1927年の改宗を経て、後期詩においては、宗教的な救いを求める方向へと変化してゆく。その頂点を表したのが、『四つの四重奏』最終行の「火と薔薇がひとつになる」瞬間である。エリオットの詩劇の初期はその流れを受けついでいるが、後期に入ると、再び「世俗的世界」が描かれるようになる。ここで注目すべきは、「世俗的世界」に生きる人々に対するエリオットの視線が寛容と温かさを湛えたものとなってゆく点である。同じ「世俗的世界」を描きながら、初期詩と後期詩劇との大きな違いにどのような意味があるのか。それをひとつの大きなテーマとして分析する。

(2) エリオットの詩劇と評論と実社会とが密接な関係にあることを明らかにする。若い頃からミュージック・ホールに魅せられていたエリオットは、芸人と観客との間で有効な協働が成立する場として劇場を捉えていた。

詩劇復活という野心を抱き続けていた詩人が、文化人やキリスト教徒・モラリストとしての視点を身につけた時、劇場は社会の人々に直接働きかける場として再認される。この意識がエリオットについて詩劇執筆を実現させ、詩劇の土台を形成していったことに注目する。当時エリオットが発表した評論、文化論、*The Criterion*掲載のコメンタリー等を参照・分析してゆくことで、「世俗的世界」と「宗教的世界」との間に彼が新たに見出した関係が明らかになる。エリオットが一般社会と正面から向き合い、共同体のより多くの人々に直接働きかける手段として選択した劇場の意義についても考察する。

#### 4. 研究成果

##### (1) 主たる成果

本研究は、T. S. エリオットの詩と詩劇が主題において密接なつながりをもつことを明らかにした上で、彼の社会批評・文化論を用いて、詩劇と評論の相補的な結びつきを示しつつ、全詩劇作品を個々に精読、分析したものである。①詩と詩劇、②詩劇と評論、という2つの着眼点に基づいて分析を行なった。概要は下記のとおりである。

##### ①詩と詩劇

エリオットの詩と詩劇は基本的に、「世俗的世界」と「宗教的世界」という2つの世界から成り立っていると言える。「プルーフロック」から『荒地』に到る初期詩の中に描かれるのは、世俗的日常世界である。それは、現代に生きる人々の精神的荒廃が、薄汚れた都会の情景や枯れ果てた不毛の風景と共に、批判と皮肉と自嘲を込めて描き出された世界であり、そこに救いは見出されない。それが「うつろな人々」を経て『精霊詩集』『灰の水曜日』になると、宗教的世界が、救いをもたらしてくれるものとして前面に置かれ、厳しい断罪と語り手の悔悟と真摯な祈りによって表現されるようになる。そして、『四つの四重奏』において、「薔薇園」の至福の瞬間や「火と薔薇がひとつになる」瞬間に到達する。エリオットが本格的に詩劇を書き始めるのが、ちょうどこの頃なのである。

このようにほとんど直線的に宗教的世界への傾斜を強めてゆくエリオットの詩の流れに詩劇を重ねてみると、批判的にとらえられる「世俗的世界」、救いをもたらしてくれる「宗教的世界」という基本構図がそのまま詩劇に受け継がれているのが明確に見てとれる。『岩』『大聖堂の殺人』『一族再会』は、詩において「宗教的世界」が急激に重んじられてゆく時期に書かれている。とりわけ『一族再会』では、世俗的な人間関係はどれひと

つとして実を結ばず、日常世界の中で生きていくことに対する冷酷までに否定的な描き方が徹底しているのである。

ところが、『カクテル・パーティ』になると、「宗教的世界」と「世俗的世界」が同等の重さに位置づけられるに到る。そこに描かれる「世俗的世界」は、初期詩において批判されたそれとは明らかに異なり、むしろ肯定的にとらえられている。ここで、「宗教的世界」が重んじられてきた詩や詩劇の流れが初めて逆転したと同時に、「世俗的世界」のとらえ方自体も転換点を迎えたと言える。そこには、「宗教的世界」と「世俗的世界」を切り離さず、優劣をつけず、穏やかに結び合わせようとするエリオットの意図が見出せる。

このような傾向はこのあとの二つの詩劇においても引き継がれ、むしろ「世俗的世界」への傾斜は一層強まっていく。『秘書』においては、「世俗的世界」を捨てて「宗教的世界」へと越境していく人物も描かれるが、これら両世界の新しい係わりを体現する人物が新たに登場する。この作品を通してエリオットは、「世俗的世界」に生きるひとりの人物の中に2つの世界の両立した生き方を探ろうとしている。日常世界の中で身近な人々との関係を断ち切ることなく、穏やかな信仰に裏打ちされた精神的世界を実現する生き方の理想型を、エリオットは示したのである。

そしてエリオットは、最後の詩劇『老政治家』において「家族愛」というテーマに到達する。この劇の大部分は、過ちだらけの人生を反省し、最愛の娘にその過去を謙虚に告白することで、人間性を回復し、安らかな最期を迎えるひとりの老人の物語である。しかし、終幕でエリオットは、強い信頼と深い愛情によって結ばれ、次の世代へとつなぎ止められてゆく家族関係を描き出したのである。

##### ②詩劇と評論

エリオットがかなり早い段階から詩劇に深い関心をもっていた理由としてしばしば言及されるのは、評論における詩劇論・劇作家論の多さである。それに加えて筆者は、彼が若い頃からミュージック・ホールの芸人に「芸術家と観客との協働」を見ていたことに注目した。エリオット最初の詩劇の試み（『闘技士スウィーニー』）は、猥雑なエネルギーに満ち、躍動的で原初的なリズムが特徴的で、ミュージック・ホールを意識した作品となっている。にもかかわらずそれが挫折した理由のひとつとして、自分の詩劇が対象とする観客層と自分なりの詩劇の目的が彼自身の中で明確に定まっていなかったことがある。

エリオットが詩劇に着手する直接のきっかけとなったのは、教会建設の資金集めを目的とした『岩』の執筆依頼であった。それは、想定された観客も劇の目的も主題も明確に

宗教的なものでありながら、ミュージック・ホールの要素が強く、喜劇的レビューと表現主義的な劇の入り混じったような斬新なスタイルをもった劇だった。かつて『闘技士スウィーニー』で挫折したエリオットが、他者との共同作業を通して劇場の意義に目覚め、同時に、実社会を見据える視線を持ち、キリスト教に根ざした「共同体」の再生をめざすところから、劇作家としての道が始まるのである。

文化人やキリスト教徒・モラリストとしてエリオットが一般社会と正面から向き合い、社会批評・文化論の中で記してきたテーマは、実は詩劇作品の中にこそ色濃く反映されている。もともと、ミュージック・ホールの芸人と観客との間に成立する「協働」に強い関心を持っていたエリオットは、やがて『クライテリオン』コメンタリー等の批評や講演で、信仰に根ざした共同体と家族の再生を繰り返し訴えるようになる。そしてその過程で彼は、より多くの人々に直接働きかける手段として劇場を再認してゆく。エリオットの詩劇は、「共同体の中で人はどう生きるべきか」という大きな主題を見出したことで軌道に乗り始めるのである。

「共同体の中で人はどう生きるべきか」という主題自体は、詩劇を追うごとに徐々に変化してゆく。その変遷の様は上記①に記した通りである。最後の詩劇の終幕でエリオットが描き出した家族像は、彼が『文化の定義のための覚書』の中で示した理想の家族像——故人に対する敬慕とまだ生まれない者への配慮に拠って成り立つ家族——そのものであった。エリオットは、信仰に裏打ちされた精神の充足感、謙虚、慈しみ、感謝、愛情といった精神世界が平凡な日常世界の中に静かに浸透してゆくさまを、最後の作品に描き出したのである。このように、詩と詩劇と評論とを関連づけて読んでいくことで、3者の有機的なつながりが浮き彫りになったと言えるだろう。

## (2) 成果の国内外における位置づけ

批評家・文化人としてのエリオットの活動と当時の社会情勢が彼に与えた影響と詩劇作品とを結びつけた研究はほとんどない。何よりも、エリオットの6つの詩劇の全体像を細部に渡り、かつ総合的・俯瞰的に分析した研究書は欧米においても数えるほどしかない。本研究は、エリオットの詩と詩劇における主題の密接なつながりを明らかにした上で、評論、文化論、*The Criterion* 掲載のコメンタリー等を用いて、詩劇と評論の結びつきを示しつつ、個々の詩劇作品を精読、分析したものである。エリオットの詩劇研究は、エリオットの著作全体の見直しになるのみ

ならず、彼が観客に伝えようとしていた現代社会の共同体や家族といった人間関係の有りようやモラルの問題を再考する契機となるはずである。

## (3) 今後の展望

本研究は、T.S.エリオットの全詩劇と、彼の詩と評論とを結んで総合的に分析したものである。これをまとめて出版することで、ひと区切りがつく。その上で、さらにエリオットの詩劇にまつわるテーマとして下記の2点を挙げておきたい。

①本研究においては、伝記的事実に基づいた分析はほとんど行なっていない。両親や最初の妻ヴィヴィアンとの関係や『老政治家』の献辞から透けて見えるパーソナルなエリオットに若干触れているが、ここで言う伝記的事実に基づいた分析とは、それとは少し意味が異なる。エリオットの個々の個人的体験や出来事と作品の内容を結びつけるのではなく、それらの体験や人間関係を通してエリオットが生涯抱え続けた罪意識というものが作品の中でどのように昇華していったかについて分析することである。それらはエリオットの多くの作品の底流にある「罪と贖い」という主題を考える際には重要な点であると思われる。

②本研究において取り上げることのできなかつたもうひとつの点は、商業演劇という観点からの分析である。ミュージック・ホールでマリー・ロイドと労働者たちとの間に成立した「協働」にエリオット詩劇の原点があったことを考えると、お金を支払って観に来してくれる生身の観客を前にして舞台上で演じられた詩劇、という点からの分析も必要であろう。演出家ブラウンの詳細な演出記録と当時の劇評は残っているものの、生身の観客とエリオット劇との間に成立した「協働」の実態を十分に把握できる材料が揃わなかつたことも一因である。エリオットが詩劇に託した「共同体再生」へのメッセージが観客たちにどのように受け取られていったか、また、それは現代においても有効なメッセージであるのかについても、考察してみる価値はあるだろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①佐伯恵子「第22回大会シンポジウム：

60年目の『カクテル・パーティ』再読——  
『カクテル・パーティ』の位置づけ」日本 T. S. エリオット協会『T. S. ELIOT REVIEW』第 21 号、2010、28-34 頁、査読無し

②佐伯恵子「エリオット詩劇概観」日本 T. S. エリオット協会『T. S. ELIOT REVIEW』第 21 号、2010、35-52 頁、査読無し

③佐伯恵子「二つの世界を結んで生きる——T. S. エリオット『秘書』——」、県立広島大学『県立広島大学人間文化学部紀要』第 4 号、2009、91-108 頁、査読無し

〔学会発表〕(計 1 件)

①佐伯恵子「60年目の『カクテル・パーティ』再読——『カクテル・パーティ』の位置づけ」(司会&講師)、日本 T. S. エリオット協会第 22 回全国大会シンポジウム、2009 年 11 月 7 日、大阪市立大学

〔図書〕(計 1 件)

①佐伯恵子「詩劇——共同体の再生をめざして」、高柳俊一、佐藤亨、野谷啓二、山口均編『モダンにしてアンチモダン——T. S. エリオットの肖像』研究社、2010年11月5日、総頁408、95-112頁、査読有り

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐伯 恵子 (SAEKI KEIKO)  
県立広島大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：40285416

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし